

平成 30 年 6 月 13 日現在

機関番号：25407

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26381240

研究課題名(和文)音楽科教育における教師の評価基盤としての価値体系の解明

研究課題名(英文)Elucidation of the value system as the teachers' evaluation in music education

研究代表者

古山 典子(KOYAMA, Noriko)

福山市立大学・教育学部・准教授

研究者番号：10454852

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文):本研究の目的は、教師の評価の基盤となる価値観と音楽家・美術家のもつ価値観とを比較することによって、学校教師の価値体系を解明することであった。そのため、研究方法としては、文献調査、フィールドワークや教師と芸術家へのインタビュー、小・中・高校教師への質問紙調査を行った。その結果、小学校教師には音の追求よりも社会性、協調性が重視する傾向が見られたが、その背景には、音楽的な専門性の不十分さがあった。本来芸術的な価値に迫る営みの中に、自己及び他者とかかわることは自ずと含まれる。小学校教師の音楽の専門性の向上は、教員養成の大きな課題でもあるが、芸術教科としての音楽科のために取り組むべき喫緊の課題である。

研究成果の概要(英文):The aim of this study is to clarify the values system of school teachers by comparing the values possessed by school teachers which will be the foundations of their assessment, and the values of the musicians and artists. The method of investigating are as follows; literature research, the fieldwork of and interviews to the school teachers and the artists (including musicians), and the questionnaire research to the elementary, junior, and secondary school teachers.

As the result of research, the elementary school teacher tends to put much value to the prosocial behavior and cooperativeness than pursuing the sound itself, and this is because of the amateurishness to the music. By right, pursuing the value of arts includes involving to oneself and also to others. Lifting the elementary school teachers' expertise is a huge challenge but for the music as a subject of arts, it is an urgent issue to address.

研究分野：音楽教育

キーワード：教師 価値観 音楽家 芸術的価値 指導観 美術家

1. 研究開始当初の背景

現在、音楽科教育は他教科と同様に、教科教育として育成した子どもの学力や態度の顕示が求められている。そのため、音楽科教育で育むべき美的価値観や情操といった目に見えるものとして現れにくい内容よりも、可視化できる教育内容への偏重が見られる。また、音楽指導で培ったはずの能力は、学校外において通用し難いために、音楽科教育は教科教育としての存在価値が見失われがちである。

教師は「教室」という独特の文化的文脈の中で、所定のプログラムを遂行しなければならないという責務と、「教師」としてどうあるべきかという思念、そして子どもの美的価値観の育成よりも、「音楽を経験すること」への偏重によって、「音楽を教えること」の意味を不問にしたまま、独特の音楽指導観を築き上げているといえるのではないかと、この課題意識を背景として研究課題を設定した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、音楽科教育の授業過程において教師の評価を支える価値観が学校文化に特有のものなのではないかと、との仮説を基に、音楽科教師と芸術家の美的価値観との比較検証を行い、学校教師の評価の基盤となる価値体系を解明することであった。この学校文化特有の価値体系の提示とその検討は、芸術教科としての音楽科の評価の在り方自体を問い直すものであり、ひいては音楽科の在り方を問うものである。

本研究の視点は、以下の2点であった。

音楽科教師の価値観と、芸術家の美的価値観にはいかなる差異があるのか。

教師の指導観と芸術家の指導観の差異の様相が、その評価内容といかに関連しているか。

3. 研究の方法

(1)文献調査：音楽や美術といった芸術分野において語られる「芸術における価値」の整理。

学校文化、教師文化がいかに形成されるのかについての基礎的研究。

(2)フィールドワーク：主に小学校音楽科授業の継続的なフィールドワークの実施。並行して、芸術家(音楽家、美術家)へのインタビュー調査と音楽指導のフィールドワークを行い、教科教育と専門教育の芸術への価値観、教育観を比較検討する。

(3)インタビュー調査：小学校教師及び芸術家へのインタビューの実施。

(4)質問紙調査：広島県及び熊本県の公立小学校教師、中学校・高等学校音楽教師への質問紙調査の実施。

4. 研究成果

(1)教師と芸術家の価値観 インタビュー調査・音楽指導のフィールドワークから

【音楽家の芸術観・音楽指導観】音楽家は、「すべての音楽に芸術性があり、それをつくり出すのが演奏者である」という。表現で重要なことは、その時々が一番良い音を選ぶことであり、演奏者が作品を「芸術」に仕上げる、と捉えていた。そして、「とにかくどんな場合にも美しい音を目指す」のが演奏者だと考えている。一方、学校教育で指導してほしいことについては、「耳を育て、作品に興味を持たせること」を挙げ、学習者自身が音楽に意味を見いだすことを求めている。

また、音楽家による実技レッスンのフィールドワークから明らかになった指導の特徴は、

模範演奏を多用する、シラブルや歌を多用する、曲を通して、音楽演奏に必要なことを伝える、の3点、そして指導観の特徴としては、作曲家のスタイルや形式観の重視、音楽を表現するためのテクニックの重視、音を聴くことの重視とその困難さへの認識があることが挙げられた。

【美術家(写真家・美術家)の場合】写真家は、鑑賞者に解釈を促すことが必要と考えており、美学者もまた、鑑賞者自身が解釈を行うことのできるものが価値ある作品と捉えていた。ここから、相対的な視点が意識されていることがうかがえる。美学者は、「今までになかった何か」の発見があることに芸術的な価値があるが、それは「技術とはあまり関係がないのではないかと」も述べた。しかし、「表現者の意図に技術が追いついているかどうか」は必要な条件となっていると捉えている点は特徴的であった。

【芸術家の特徴】音楽家が自らと作品との対話を突き詰めようとする態度が浮き彫りになるのに対して、美術家は社会とのかかわりにおいて作品を捉えようとする態度が特徴的であった。しかし、音楽家たちにとっても、自らのストイックな音楽表現の追求の果てに、鑑賞者が存在することは言うまでもない。

音楽家と美術家へのインタビューから、「芸術的な価値」には、表現者にとっての価値、また鑑賞者にとっての価値と、社会的な視点から見た「価値」といった捉え方が存在していること、そしてそれらがそれぞれ関連していることが明らかとなった。

【学校教師の場合】小学校教師(音楽専科ならびに担任教師)による音楽科の意義に対する認識は、以下の8点に集約できた。

一体感(所属感)を得ることができる

自分自身が音楽を楽しむこと、生活に潤いを与えられる

自分を伝える、自分の成長に繋がる

「コミュニケーション能力」に繋がる
 楽しさ、心地よさを伝えたい
 知らない世界、知らない時代を知ることができる
 音楽の技術もしっかり教える、
 聴いて気づくことを大切にしたい
 その一方で、中学校教師は、美しい音楽
 を聴いて美しいと思える感受性を育てる、
 自分が良いと思えることを共有できるように
 する、多くの曲に触れる、生涯にわた
 って音楽を好きにさせたい、合唱コンク
 ールによって一体感が得られる、という5点が
 音楽授業に対する認識の特徴として挙げら
 れた。

また、小学校音楽専科教師の音楽授業のフ
 ィールドワークから明らかとなった音楽指
 導観の特徴は、音楽指導に「段階」がある、
 音楽の楽しさの捉え方、「体験すること」
 の重視、「人間教育としての音楽教育」と
 いう指導観の存在、の4点であった。

(2) 教師の音楽指導観 質問紙調査から

音楽指導観について、広島県内公立小学校、
 中学校、高等学校の教師、及び熊本県公立小
 学校教師を対象に質問紙調査を行った。(総
 回答数 368。内訳：小 280，中 63，高 19，中・
 校一貫 6。)

表1は、「音楽指導に困難を感じるか」に
 ついての回答結果である。

表1 校種・立場別「音楽指導に困難を感じるか」

	【小以外】 音楽専科	【小】	
		音楽専科	担任
とても 感じる	5%	18%	12%
まあ 感じる	64%	49%	61%
あまり 感じない	24%	20%	22%
全く 感じない	7%	12%	5%

ここから、小学校音楽専科教師には、自分
 の専門性を生かして困難を感じることなく
 指導できている教師がいる一方で、困難を強
 く感じながら指導を行っている教師の双方
 が存在していることがうかがえる。この状況
 の背景には、音楽専科制度を採っていない自
 治体では小学校の音楽専科教師の任命基準
 が弾力的であり、教員養成課程で音楽を専攻
 していなくても、校内の教員の中で相対的に
 音楽経験があれば音楽専科を任せられる場
 合がある、という実情があると考えられる。

また、教師が音楽指導で重視していること
 について選択肢を挙げ、上位2位までの順位
 法で回答を求めた。校種別の結果を図1、図
 2、図3に示す。

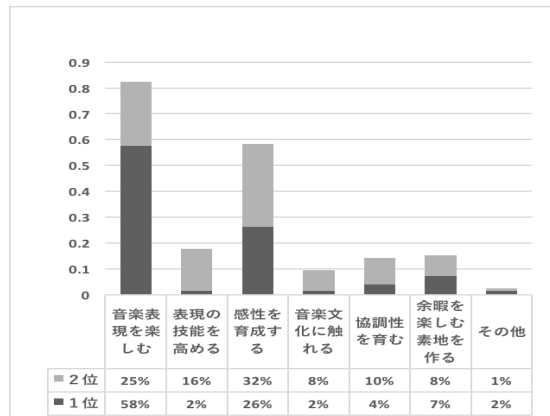


図1 小学校教師が音楽指導で重視すること

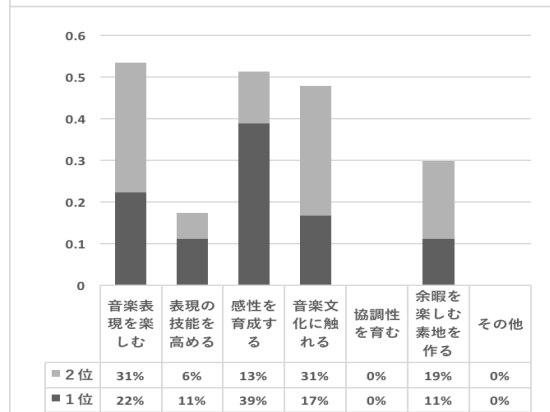


図2 中学校教師が音楽指導で重視すること

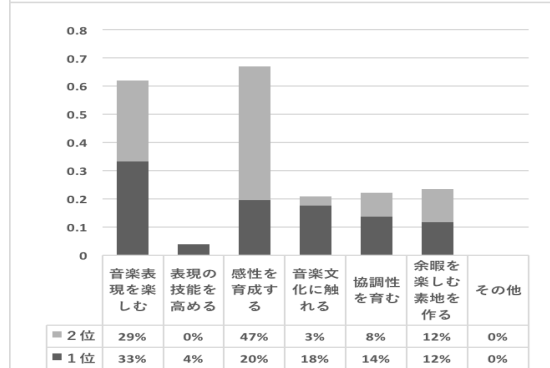


図3 高校教師が音楽指導で重視すること

これらの質問紙調査の結果からは、小学校
 教師の指導観に中・高の教師とは異なる様相
 が見られ、次の4点が明らかになった。

1. 音楽科はいずれの教師も必要だと考える
 傾向があるが、とくに初等教育において、
 その必要性を教師は感じている。
2. どの校種も音楽科では「音楽表現を楽し
 むこと」を重視しているが、学年段階が上
 がるにつれてその割合は低くなる。
3. 小学校教師は「指導法について」困難を
 感じている割合が高い。
4. 「教材選択の仕方や指導内容」について
 困難を感じるのは、教員歴の浅い教師が多
 い。

(3)教職課程の大学生の教師観・音楽指導観
 大学生 281 名に質問紙調査を行ったところ、表 2、表 3 に示す回答結果が得られた。

表 2 大学生の考える「音楽授業」という場

みんなと一緒に音楽する場	125
音楽の知識を身につける場	49
息抜きの場	34
普段接することのない音楽に触れる場	27
音楽表現の技術を身につける場	15
音楽を理解する場	11
その他	5

表 3 大学生の考える音楽授業の役割

協調性（一体感・協力）	66
楽しむ	65
音楽経験を広げる・興味を持つ	28
感性（感受性）を豊かにする	25
気晴らし・息抜き・安らぎの時間	24

教師を目指す学生にとって、音楽授業が学びよりも楽しさを重視されていること、また教師の存在が教科の印象に大きく影響することが改めて明らかになった。

(4)学校教育における「芸術的価値」

渡辺護（1983）は「芸術創作の特性」について以下の 6 点を挙げている。

1. 自己目的的事であること
2. 精神の創造であること
3. 創造が形象性のうちに行なわれること
4. 技術が重要な意味を持つこと
5. 精神の全体性を必要とすること
6. 精神と感覚との密接な協働が行なわれること

そして、芸術は伝達構造をもつため、創作にあたって芸術家はその作品が鑑賞者によってできるだけ正当に受容されるよう配慮しなければならないという。つまり、「芸術」そのものが、単なる自己表現にとどまらず、他者に対して創作する者自身による伝達すべきものごとを、鑑賞者に伝えられることを意識内に置く必要がある、ということである。

ここで学校教育における音楽科教育での音楽活動を振り返る時、学習者が自らの内面と対峙し、何らかの創作意欲の喚起によって、準備された、あるいは用いる素材を使って表現する、ということを目指していることは明確である。しかし、そこに鑑賞者への視点は確保されているのだろうか。

音楽科教育では、「行為」に優先的に価値が置かれてきた、といえる。たしかに、「芸術的行動」は、実用目的のために行うのではなく、「創作したい」という欲求から行われるものであり、「それ自身のうちに目的がある」という意味で、自己目的性を持つ」とい

る。また渡辺が、「自己目的的行為はまさに自己目的であるが故に、それ自体に価値を持つ」と指摘するように、学校教育における芸術教育である音楽科教育に、一人ひとりの個人にとって意味があるもの、価値があるものを擁護する傾向が生じるのは必然といえる。しかし、教育そのものが、他者（多くは教師）によって活動目的が設定され、それを達成させることを肯定してきたはずである。つまり、他者によって目的づけられた行為を、自らのものとして自己目的化しなければ、芸術行為の価値が損なわれる、ということである。

当然、学校教育では、作品と行為とを切り離すことはできない。また、時間や環境等の制限が幾重にも課せられる中で、純粋に作品の質を追求することを第一義とすることへの困難さを指摘されるであろう。しかし、作品として作ったり、歌ったり演奏したりする時、それを作り出す自己目的的な行為そのもの、つまり、作り出されたもの（客体化された作品や音楽表現）そのものに、作り出した者の自己目的（何を表そうとしたのか）とその過程が伝えられることとなる。それゆえに、音楽科においては暗に「行為」を尊ぶのではなく、その行為の先にある作品、あるいは音楽表現の「質」が「行為の質」をも含み置くことが求められる、ということなのではないだろうか。

子どもたちが自分の感情の発露として歌を歌い、友達と視線を合わせ、音や声を合わせて微笑む姿に、音楽授業の価値は容易に見いだすことができる。その一方で、音楽科が抱える課題は多い。授業時間数の少なさ、教育活動の成果として学力の明示が求められるという背景、さまざまな音楽経験を有する集団の学習者を指導するという条件、そして教員養成の大きな課題でもある教師自身の音楽の専門性の向上。これらは、音楽を追求することで得られる喜びに至る前に立ち塞がる障壁となっている。しかし、音楽科教育において、音楽そのものを深く追求することで得られる学びがあることを、改めて認識する必要があるのと同時に、音楽科教育が本来もつべき芸術教科としての「真正性」について、検討を続ける必要がある。

< 引用文献 >

渡辺護（1983）『芸術学 改訂版』東京大学出版会、p.26、28、70、及び pp.81-82。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 7 件)

古山 典子、瀧川 淳、質問紙調査に見る教師の音楽指導観 自由記述回答の計量テキスト分析を通して、福山市立大学教

育学部研究紀要, 査読有, vol.6, 2018, pp.19-29.

http://doi.org/10.15096/fcu_education.06.03

瀧川 淳, 古山 典子, 大学生の考える小学校音楽教師の資質・能力, 熊本大学教育学部実践研究紀要, 査読無, 増刊号, 2018, pp.79-85.

<http://hdl.handle.net/2298/39265>

古山 典子, 瀧川 淳, アンケート調査から見る音楽教師の音楽指導観, 福山市立大学教育学部研究紀要, 査読有, vol.5, 2017, pp.25-33.

http://doi.org/10.15096/fcu_education.05.03

Noriko KOYAMA, Jun TAKIKAWA, A Comparative study of the values of music and teaching possessed by the school music teachers and the artists, *Abstracts 32nd World Conference International Society for Music Education*, 査読無, 2016, p.87.

古山 典子, 瀧川 淳, 音楽科教師と音楽家における音楽指導観の比較研究, 福山市立大学教育学部研究紀要, 査読有, vol.4, 2016, pp.21-32.

http://doi.org/10.15096/fcu_education.04.03

瀧川 淳, 古山 典子, 質問紙調査を通して見る大学生の音楽教育観ならびに音楽教師像, 熊本大学教育学部紀要, 査読無, 65号, 2016, pp.155-161.

<http://hdl.handle.net/2298/35882>

古山 典子, 瀧川 淳, 小学校教師と音楽家における音楽指導観の比較研究, 学校音楽教育研究, 査読無, vol.19, 2015, pp.243-244.

[学会発表](計7件)

古山 典子, 瀧川 淳, 教師の音楽指導観に関するアンケート調査, 第47回日本音楽教育学会, 2016.

Noriko KOYAMA, Jun TAKIKAWA, A Comparative Study of the Values of Music and Teaching Possessed by the School Music Teachers and the Artists, The 32th International Society for Music Education, World Conference in United Kingdom, July 2016.

瀧川 淳, 古山 典子, 小中高における音楽教師の音楽観・指導観について, 第18回日本教育実践学会, 2015.

古山 典子, 瀧川 淳, 芸術家の考える「芸術的価値」について 音楽家と美術家へのインタビュー調査を基に, 第46回日本音楽教育学会, 2015.

古山 典子, 創作活動における「芸術的価値」と「教育的価値」について ポーカロイドの展開可能性を視点として, 日本学校音楽教育実践学会第8回中国支部例会, 2015.

瀧川 淳, 古山 典子, フィールドワークとインタビューの分析を通じた音楽指導観の比較研究 小学校教師と音楽家の場合, 第45回日本音楽教育学会, 2014.

古山 典子, 瀧川 淳, 小学校教師と音楽家における音楽指導観の比較研究, 第19回日本学校音楽教育実践学会, 2014.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

古山 典子 (KOYAMA, Noriko)
福山市立大学・教育学部・准教授
研究者番号: 10454852

(2) 研究分担者

瀧川 淳 (TAKIKAWA, Jun)
熊本大学・教育学部・准教授
研究者番号: 70531036